掲載日:2011年05月28日，面名:オピ１，記事ID:KIJ20110528_M002900100CP08001
(C)新潟日報社

特別編集委員の目

悪口の理由

権力監視 責務果たす

新潟国際情報大学
情報文化学部教授
越智 敏夫

おち・としお　1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治学理論。

この特別編集委員の執筆を担当して1年の節目となる。本欄ではこれまで世の中の問題について批判、批評してきたつもりである。しかしそれは簡単にいえば他人の悪口を言い続けてきたということでもある。あまりほめられたことではない。

そこで委員の延長を機に今回は他人ではなく自分について少し論じてみたい。

自分はなぜこのような文章を書くのか。その理由についてである。

まず考えたいのは大学教員という職業である。ふだん何をしているのか、外部からはわかりにくいかもしれない。特殊な大学は別にして、一般的に大学教員は三つの仕事をこなす。研究、教育、行政である。

研究とは論文執筆、学会での研究報告などである。学会運営なども付随する。そしてその研究成果をもとに講義をし、ゼミナールで学生と議論する。卒論の指導も含まれる。これが教育である。行政とは大学運営への参加である。入試問題の作成、学生の就職支援から生活指導、高校での模擬講義、海外提携大学との交流まで、実に広範だ。

好きでやっているとはいえ、以上の3種をこなすのはけっこうきつい。逆にいえばこの三つさえしていれば、セクハラのような愚行をしない限り大学教員の身分は保障されている。

しかし本来この身分保障は「学問の自由」に関連している。研究と教育を兼務する大学教員は思想信条の自由が保障されなければ活動できないのだ。

このように大げさなことを書くとちょっと恥ずかしい気もするが、自由に思考できない状態でまともな研究ができるはずはないし、発言の自由さえ持たない者がまっとうな教育などできるはずがない。だからこそ大学教員は制度的に守られている。

そしてその身分保障は単に研究や教育のためだけでなく、大学教員が負うべき社会的義務のためでもある。そのなかの重要なひとつが権力のチェックだと個人的には考えている。ここでいう権力とは政治権力だけでなく経済的実力者や文化的権威も含まれる。

そうした権力に共通した特性は、自らの権力を行使して自己を正当化し続ける点である。それと同時に権力は権力への批判者を常に社会的に孤立させようとする。私はそのような社会が良いとは思わないし、そんなところに住みたいとも思わない。

自分への批判をすべて封殺するような市長や知事の自治体に誰が住みたがるだろうか。これは誰を権力者にするかという問題ではなく、どのような社会を作るかという問題なのである。

だから権力は常に監視される必要がある。もちろんマスメディアはその責務を負う。しかし発言の自由を確保されている大学教員も同様だろう。

世の中には多くの義理やしがらみがある。政府や大企業に対して批判的な人がいたとしても、人間関係などのためにその批判を公にしづらいかもしれない。しかし大学教員は遠慮なく批判できる。個人として発言するかぎり、企業や政治家を批判しても困ることは何もない。

当然であるが、以上は個人的見解である。政府や自治体の政策を支持し、社会の安定に寄与することに意味を見いだす大学教員もいるだろう。教員間の相互批判さえ保障されていれば、それはそれでかまわない。

しかし現在の震災復興の過程において各種の権力は震災前の既得権益を維持しようと必死になっている。本来であれば新たな価値観さえ構築されなければならない状況である。こういう事態においてこそ大学は権力に対して従来以上の批判的姿勢を示すことが要求されているのではないだろうか。